平成 28 年度　独立行政法人福祉医療機構　社会福祉振興助成事業

「貧困世帯の子どもの居場所作りと学習支援」事業
活動報告書

一般社団法人みやざき公共・協働研究会

目　次

Ⅰ　はじめに　・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　取り組んだ事業　・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ　全国・宮崎県・宮崎市の貧困の現状　・・・・・・・・・・・・・5

Ⅳ　各事業の実施内容　・・・・・・・・・・・・・8
1）家庭訪問相談・相談会
2）子ども食堂
3）学習塾「宮崎みらい塾」
4）社会体験・自然体験プログラム等
5）事業報告会

Ⅴ　おわりに　・・・・・・・・・・・・・21

参考：各事業のアンケート調査結果　・・・・・・・・・・・・・26

Ⅰ　はじめに

H27年度、ＮＰＯ法人みやざき教育支援協議会との連携で「生活困窮世帯への学習支援事業」に取り組み、一定の成果を上げることができたが、逆に下記のような大きな課題を見つけることとなった。

・貧困家庭や学習困難な生徒がいる家庭において親の貧困への支援がまず必要であること
・まずは学生が気軽に集まれる居場所を確保すること
・学習意欲を高めるためにも同じ場所に来る学生がイベント等を通して同士が友達になること
・食や必要な情報を届けること
・各支援の連携が取れていないこと

などが、大きな課題と認識と捉え事業を行った。

今年度、上記課題のうち、「貧困家庭や学習困難な生徒がいる家庭において親の貧困への支援がまず必要であること」と「学生が気軽に集まれる居場所を確保すること」の改善に取り組んだ。

具体的には家庭訪問や相談会を通して、親の抱える悩みを共有し、それを地域の各支援団体とのネットワークを通して解決する支援を行い、次に子供の居場所づくり、学習支援に繋げていった。学習塾が、家庭と学校に次いで、第３の居場所となるように、子どもや親のストレスの軽減につとめ、また食や各体験イベント等を通して、学習意欲が高まるようになる環境づくりを目指した。

事業の初めは、いろいろと戸惑うことも多かったが、宮崎市教育委員会の後援を得ることができ、事業後半には、いろいろな支援の手が差し伸べられることとなった。お米や野菜の提供。また地域の主婦たちのボランティア参加、また塾に参加する学生によるボランティアグループの立ち上げなど、支援される側にいるだけでなく自分たちができることをやっていこうとする積極性も生まれてきた。

今回の事業を通して「学習支援」の視点だけでなく、ソーシャルワーク、子どものウェルビーイング (Child Well-being) の視点から包括的な地域からの支援の必要性を認識することができた。

マスコミの取材も受ける機会が多くなり、ラジオ番組などにゲスト出演をする機会を得ることができた。さらに次年度には、地元テレビ局の貧困に関する特別番組に協力することも決まった。また地元ＪＡをはじめとする企業の協力も取り付けることとなった。

小さな波が大きな流れを起こしつつある。この流れを大切にしながら連携団体とともに貧困世帯の支援の大きなうねりを起こしていきたい。

最後に、この事業を通してご協力・ご支援頂いた関係機関・関係団体の皆様に感謝申し上げます。

II　取り組んだ事業

1．事業概要

「貧困世帯において社会的な交流や学習する機会に恵まれない学生やその親に対して、親には悩みを解決するための支援や子どもへは学習する意欲を高め学習習慣を身につけてもらい、就労まで希望をもてるように支援する」ことを目的に、「親への相談事業、学習塾を実施しながら、親子のための食事会での居場所作り、また社会的な活動や事業に参加することで中高生が地域社会との関係を築き、また宮崎に貧困家庭支援の関係機関のネットワークを構築」する事業として今年度取り組みました。

2．事業実施の連携団体

連携団体名	活動分野	要望事業における連携（役割分担）の具体的な内容
ＮＰＯ法人みやざき教育支援協議会	ICTによる教育支援	学習支援のサポート、支援員の募集、学生の募集、研修企画
ＮＰＯ法人宮崎県ボランティア協会	障害者福祉	支援員の募集、学生の募集、生活困窮家庭の掘り起こし、学習教室の開放、学習支援ネットワークの構築
有限会社サングロウ	地域づくり支援	学生の募集、、学習教室の開放自然体験プログラム、各種交流プログラムの企画、実施、研修企画
学遊館　つねひさ	発達障害児への学習支援	学生の募集、支援員の募集、生活困窮家庭の掘り起こし、学習教室の開放
ＮＰＯ法人宮崎21高齢者福祉研究会	高齢者・障害者の支援	学生の募集、支援員の募集、生活困窮家庭の掘り起こし、子ども食堂の企画・運営

3．現状と課題

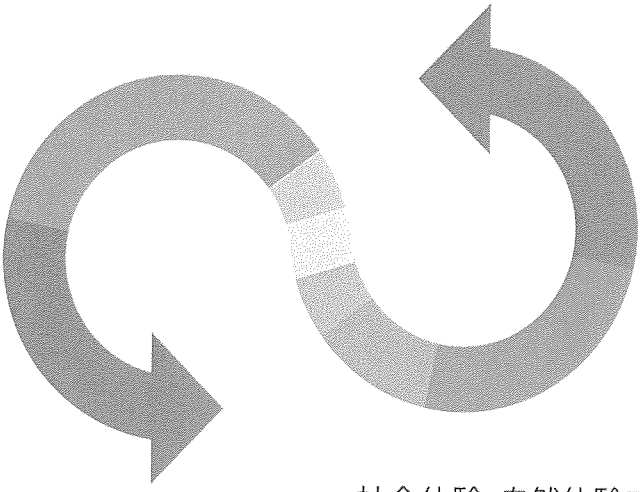
≪事業のイメージ≫

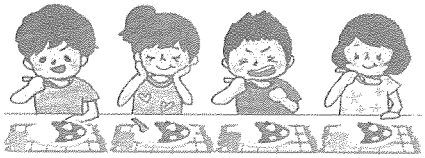
家庭訪問相談・相談会の実施

①目的　生活困窮家庭や学習困難児を抱える家庭の悩み・不安の解消のため
②実施内容　月2回の相談会を実施するとともに、仕事の都合等で相談会に参加できない家庭に訪問し、子どものしつけや学習に関して相談を実施する。
面接相談　32回　アウトリーチ相談　32回

学習塾の開催

①目的　生活困窮家庭の子ども達等に、e ラーニング教材の提供を通して、自主学習の習慣を身につけ学力の向上を図り、自立する力をつけさせ、進学・就職への力をつけさせる。
②実施内容
○実施回数　週2回、月8回程度　8ヶ月3ヵ所
合計245回
延べ参加人数　664人
○実施場所　南駅前ふれあいサロン、宮崎県ボランティア協会、学遊館





子ども食堂の実施

①目的　子どもたちが一緒に過ごす機会を作り、食事を通して、生徒同士また親子で参加することで、お互いがしゃべりやすい雰囲気になり、またそれぞれの関係性に変化を見出したり、偏りがちな食事の改善を図る。また、地域のボランティアに運営の協力を得ることで、地域の中で子どもの見守り役の方を増やしていく。
②実施回数　計8回　2016　10月～
2017　3月

社会体験・自然体験プログラム等の実施

①目的　生徒と学習支援員、生徒同士の交流や親睦を深めるため、また社会体験を通じて、社会との接点と学生としての役割を見つけ、また地域の大人との触れ合うことで地域の中で子どもの見守り役の方を増やす。
②実施内容
・2016/10/16　ジュニアドリームプロジェクト「親と子にとっての夢とは?」
・2016/1/29「子どもの成長に大切なこと」

報告会

日　時　平成29年3月12日(日)13時半～16時半
内　容
●講演
「ソーシャルワークから見た子ども若者の貧困と支援のあり方」
●WAM助成事業報告
●井戸端会議(シンポジウム)　テーマ「つながりを求めて」

Ⅲ　全国・宮崎県・宮崎市の貧困の現状

全国における、貧困率に関するデータは、以下の表となります。

（注：子どものいる現役世帯における「大人」とは必ずしも「親」とは限りません。大人１人の世帯は、ひとり親世帯の場合が多いですが、大人２人の場合でも子どもの一人が成人しているひとり親世帯なども含まれます。また、ひとり親世帯が祖父母などと同居している場合も含まれます。

○厚生労働省「平成 25 年国民生活基礎調査の概況」より

貧困率（%）	85年	88	91	94	97	0	3	6	9	12
全個人	12	13.2	13.5	13.7	14.6	15.3	14.9	15.7	16	16.1
子ども	10.9	12.9	12.8	12.1	13.4	14.5	13.7	14.2	15.7	16.3
子どものいる現役世帯の世帯員	10.3	11.9	11.7	11.2	12.2	13.1	12.5	12.2	14.6	15.1
大人1人の世帯	54.5	51.4	50.1	53.2	63.1	58.2	58.7	54.3	50.8	54.6
大人2人以上の世帯	9.6	11.1	10.8	10.2	10.8	11.5	10.5	10.2	12.7	12.4
貧困線(1人世帯の場合)(万円)										
名目値	108	114	135	144	149	137	130	127	125	122
実質値(1985年基準)	108	113	123	128	130	120	117	114	112	111

注：１）平成 6(1994) 年の数値は、兵庫県を除いたものである。

２）貧困率は、OECD の作成基準に基づいて算出している。

３）大人とは１８歳以上の者、子どもとは１７歳以下の者をいい、現役世帯とは世帯主が１８歳以上６５歳未満の世帯をいう。→「子どものいる現役世帯」の貧困率は子どものみならず大人も含まれます！

４）等価可処分所得金額不詳の世帯員は除く。

５）名目値とはその年の等価可処分所得をいい、実質値とはそれを昭和 60 年（1985 年）を基準とした消費者物価指数（持家の帰属家賃を除く総合指数）で調整したものである。

宮崎県では、母子世帯の数が増加しており、そのなかで母子世帯の母親の就労形態は、父子世帯の父親と比較すると臨時雇用の従事が圧倒的に多い。

母子世帯では、「給料が安いこと」が問題として最も多くなっている。

「宮崎県におけるひとり親世帯数の推移」

（宮崎県「こども対策特別委員会資料」平成 27 年 5 月 28 日、福祉保健部作成）

調査年	総世帯数	母子世帯		父子世帯	
	(件)	世帯数(件)	出現率(%)	世帯数(件)	出現率(%)
1997 年	430,989	12,270	2.85	2,385	0.55
2002 年	448,142	14,102	3.15	2,573	0.57
2007 年	459,690	15,294	3.33	2,621	0.57
2012 年	467,415	15,675	3.35	1,645	0.35

「ひとり親世帯の就労形態」(平成24年宮崎県「ひとり親世帯実態調査」)

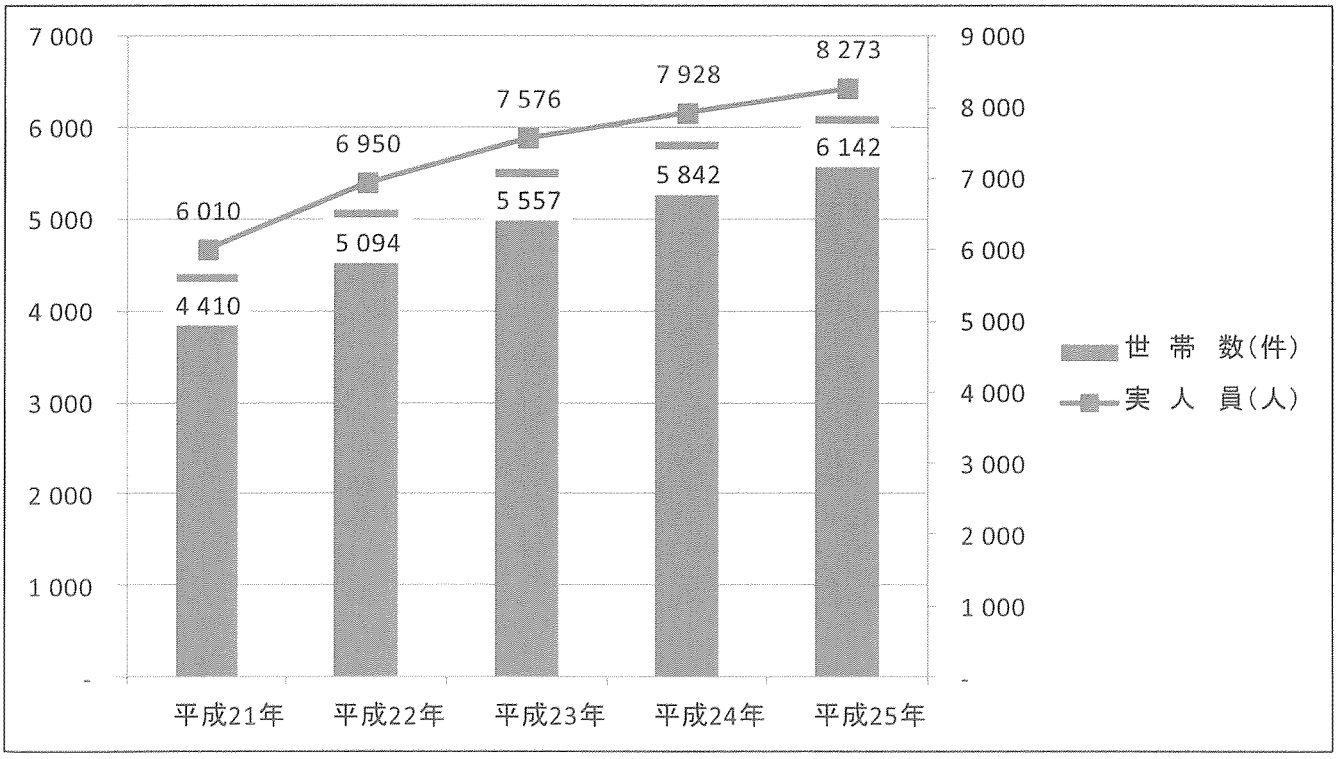
区分	常用雇用者	臨時雇用者	自営業	内職・その他	無職
母子世帯(%)	43.3	40.0	6.2	2.3	7.4
父子世帯(%)	55.6	12.3	23.4	2.7	4.2

「ひとり親世帯における主な就労上の問題」
(平成24年宮崎県「ひとり親世帯実態調査」)単位:%

母子世帯		父子世帯	
給料が安い	46.8	子どものことで休むこと	36.2
子どものことで休むこと	33.1	給料が安い	35.8
身分が不安定	14.7	残業ができない	10.9
育児等のため条件のいい仕事ができない	12.5	育児等のため条件のいい仕事ができない	10.2

宮崎市では、児童扶養手当の支給をはじめ、ひとり親家庭等の生活向上や就業・自立への支援、幼児教育・保育の利用に係る利用者負担の軽減、さらに、生活困窮世帯・生活保護世帯の子どもへの学習支援、就学援助等に係る事業を実施している。
また平成8年度は、ひとり親家庭等の児童に対して学習支援を行う、「ひとり親家庭等学習支援ボランティア事業」を新たに実施し、さらに「ひとり親家庭等生活応援事業」を実施している。

宮崎市の被保護世帯の現状



宮崎市のこどもの進学率等の現状

高等学校への進学率は徐々に上がってきている。

項目	宮崎市			宮崎県		参考
	平成26年	平成27年	平成28年	現状 平成26年	目標値 平成27年	(一般世帯) 平成26年
被保護世帯の子どもの高等学校への進学率	77.9	92.6	94.4	83.3	93.0	98.0
〃(人)	21/99	6/71	4/78			
被保護世帯の子どもの高等学校の中退率	8.8	1.6	2.5	6.8	2.0	1.6
被保護世帯の子どもの大学への進学率	26.5	34.2	28.6	25.5	－	31.7
被保護世帯の子どもの就職率(中学卒業後)	4.8	1.2	1.4	3.9	－	2.0
被保護世帯の子どもの就職率(高校卒業後)	64.7	57.9	52.9	52.1	－	43.6

Ⅳ　各事業の実施内容

1）家庭訪問相談・相談会

①目的　　生活困窮家庭や学習困難児を抱える家庭の悩み・不安の解消のため

②実施内容　月２回の相談会を実施するとともに、仕事の都合等で相談会に参加できない家庭に訪問し、子どものしつけや学習に関して相談を実施する。その場で解決できないことは関係機関につなぐかたちで実施。個別に子どもの居場所作りも行った。

実施方法	相談会	家庭訪問
③実施期間	H28年７月～平成29年２月 13:00～16:00（相談会のみ）※家庭訪問は各家庭に応じて時間を調整	
④実施回数	月2回（年16回）	
⑤実施場所	南宮崎駅前ふれあいサロン	各家庭
⑥対象者件数	相談会参加　2件/回（年32件）　家庭訪問相談　4件/月（年32件）	
⑦スタッフ構成	主任相談員1名、相談員8名（非常勤） 主任相談員1名は、週に3回程度の勤務。 全体のコーディネートや電話相談を担当する。 事務局スタッフ 2名（会場設営、資料作成など）	

当初は、相談場所と時間を決めて、予約により受け付ける「相談会」と「家庭訪問」の２本立てで計画したが、実際はクライアント側の予定と相談日がマッチングせず、なかなか実績が上がらなかったため、相手側の希望の日時に応じた相談と家庭訪問に切り替えた。

○実　績　　面接相談　32回　アウトリーチ相談　32回

○つないだ機関等
みらい塾　プレミアム親子食堂　プレミアム子ども商店　みやざき若者サポートステーション
遊学舎（フリースクール）温もりの部屋　　プロジェクトＭ　　サラ・エンターテイメント
プチ　・コパン（子育て支援）　ファミリーサポートセンター　レインボー教室　いまじん英語
少年　バレーボール　貧困を考える井戸端会議　病院　子ども食堂　ＨＩＮＯサイクル
ポノ・ポ　ノ就労移行支援　コーミン館　自由な学校を創りたい親の会　ママだって学びたい
表現　ワークショップ　クローバー会

○相談内容の概要
学習（学校・自宅）　進路　生活リズム　不登校　親自身の暴言　子どもの家庭内暴力
非行　お金　祖母祖父・夫婦・別れた夫との関係・兄弟の関係　交際相手と子どもの関係
学校での　人間関係（教師、生徒）　子どものコミュニケーション　将来について
居場所 ゲーム依存　虚言　いじめ　性の問題　病院先　就労について　子親のストレス
解消について　親の心　の問題　親の職場の問題　親の恋愛　自己肯定感の低さ
親の対人恐怖・不安障害　オーバ　ー　ドーズによる対応　別居している親との関係
子どもへ嫌悪感　部屋の散らかり

≪相談事業の感想≫

子どもの貧困についてあまり経験がなく体制的にも手探り状態であったのもあり、広報・連携が不十分であった。2,3月にかけてようやく認知されてきたという反応が見えてきた。良かった点は、個別に親子の居場所の立ち上げや、他居場所などをコーディネイトができたこと。貧困ひとり親の引きこもり児童が、学習付きの訪問支援で学習意欲が出、親子とも心が開いてきたこと。親の口調・表情が穏やかになったり、親子関係が良好になったりしたこと。親・子ともにキャリア支援ができたこと。広報や行政・学校・就労支援・福祉などの関係機関、地域との連携を広げ必要があると感じた。家族に寄り添いながら、繋がりの中での自立を支援していくことが大事だと感じた。

【相談支援事業参加者アンケート】

○対象者：16 人、回答者数 11 人、回答率 68.8%

【性別】	①男性	②女性			
	1人(9.1%)	10人(90.9%)			
【年代】	①10歳代	②20歳代	③30歳代以上	④40歳代以上	⑤50歳代以上
	1人(9.1%)	0	1人(9.1%)	7人(63.6%)	2人(18.2%)
1. 相談支援の内容全般について、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)					
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足	
	6人(54.5%)	4人(36.3%)	1人(9.1%)	0	
2. 相談支援に参加後、「家庭の問題が解決した」、「親子関係が改善した」、「家庭が明るくなった」など、今後の生活に良い変化が期待できそうですか？(○はひとつ)					
	①とてもそう思う	②そう思う	③そう思わない	④まったくそう思わない	
	5人(45.4%)	5人(45.4%)	1人(9.1%)	0	
3. 相談支援員の助言内容について、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)					
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足	
	7人(63.6%)	3人(27.2%)	1人(9.1%)	0	

2) 子ども食堂

①目的

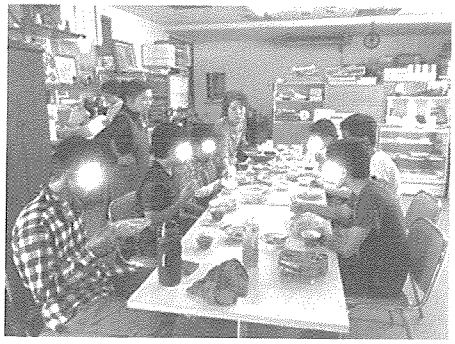
子どもたちが一緒に過ごす機会を作り、食事を通して、生徒同士また親子で参加することで、お互いがしゃべりやすい雰囲気になり、またそれぞれの関係性に変化を見出したり、偏りがちな食事の改善を図る。また、地域のボランティアに運営の協力を得ることで、地域の中で子どもの見守り役の方を増やしていくことを目的として実施。

②実施内容

親子で参加する料理教室およびレクリエーションなどで一緒に楽しめるエンジョイタイムの実施

③開催実績（参加実績　延べ参加人数　子ども110名、大学生4名、大人93名　計207名）

	開催日	参加者数	内容
①	2016 年 10 月 8 日（土） 18:00～20:30	18名 （子ども13名、大人5名）	夕食会、発酵食品づくり、レクリエーション＆ゲーム
②	2016 年 10 月 30 日（日） 10:00～14:30	14名 （子ども9名、大人5名）	畑作業、昼食会、レクリエーション＆ゲーム
③	2016 年 11 月 13 日（日） 12:00～15:00	14名 （子ども9名、大人5名）	チヂミづくり、昼食会、レクリエーション＆ゲーム
④	2016 年 12 月 11 日（日） 12:00～15:00	16名 （子ども10名、大人6名）	昼食会、クリスマスリースづくり、レクリエーション＆ゲーム
⑤	2017 年 1 月 7 日（土） 12:00～15:30	33名 （子ども18名、大人14名）	食事会、フリーマーケット、レクリエーション＆ゲーム、子どもの出し物（DJ 披露）
⑥	2017 年 1 月 29 日（日） 12:00～17:00	55名 （子ども26名、大人29名）	昼食＆ふれあい交流会、レクリエーション
⑦	2017 年 2 月 19 日（日） 12:00～17:00	22名 （子ども9名、大人13名）	昼食＆ふれあい交流会、リズム手遊びなど
⑧	2017 年 3 月 11 日（土）11:30 ～15:30	36名 （子ども16名、大学生4名、大人16名）	昼食＆ふれあい交流会、防災についての勉強会、創作バルーンの披露など



【子ども食堂参加者アンケート】

○対象者20人、回答者数18人、回答率90.0%　※ある程度定期的な利用者

【性別】	①男性	②女性	
	14人(77.8%)	4人(22.2%)	
【年代】	①10歳代未満	②10歳代	③20歳代以上
	3人(16.7%)	14人(77.8%)	1(5.5%)

1. こども食堂の内容全般について、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)				
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
	6人(33.3%)	10人(55.6%)	2人(11.1%)	0
2. こども食堂に参加後、「家族で話す機会が増えた」、「友達ができた」、「食に対する意識が変わった」など、今後の生活に良い変化が期待できそうですか？(○はひとつ)				
	①とてもそう思う	②そう思う	③そう思わない	④まったくそう思わない
	4人(22.2%)	8人(44.4%)	6人(33.3%)	0
3. こども食堂のメニューについて、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)				
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
	8人(44.4%)	8人(44.4%)	2人(11.1%)	0
4. こども食堂のレクリエーション等について、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)				
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
	6人(33.3%)	10人(55.6%)	2人(11.1%)	0

《子ども食堂の感想》

・貧困のこどもたちへの食事支援ということで、なかなか難しい事業だと感じながら進めていった。貧困を認めたくないという心理が理解できるのと食事を提供するということで果たして子ども達が参加してくれるものかと不安の中での事業実施であった。当初は、声をかけてもなかなか子供が集まらず、また周囲の理解・協力も進まなかった。地域のこども支援の方々の中にも協力をお願いしたが、貧困世帯の方にどう声をかけるのかなどの不安があり、積極的に声をかけにくかったようだ。

・チラシの文面に「誰でもどうぞ」の声かけに参加してくれた子ども達も徐々に増えてきた。参加した子供たちやスタッフ、ボランティアさん達が一緒に嬉しそうに食べ、喜んで協力して頂いたことに、この取り組みの意義を感じることができた。また今後の課題も見えてきたし、知恵、工夫で多くの子ども達の支援を得ることが確認を持てた。物資の提供を支援をしてくれる方々の輪も広がって来ました。これからの社会を担う子ども、若者の支援を我々大人の力で積極的に行い、安心して育つ環境整備を図れるよう、さらに多くのことを学習しなければならないと思います。

3）学習塾「宮崎みらい塾」

①目的

生活困窮家庭の子ども達等に、eラーニング教材の提供を通して、自主学習の習慣を身につけ学力の向上を図り、自立する力をつけさせ、進学・就職への力をつけさせることを目的として実施。

②実施内容

自学自習の習慣化およびモチベーションを持続させるために、Eラーニング教材「ユニバーサル数学」のライセンスを取得。

小学生の児童から高等学校の生徒まで、児童生徒が空き時間に、学習支援団体の教室、自宅などで、何回でも視聴可能とした。

学習履歴システム（LMS）を通して、直接またはサイトの掲示板などでアドバイスをした。

一般の学習塾として開催し、生活困窮家庭・ひとり親家庭等に対しては、利用料を免除した。

タイピング、ビジネス文書作成、MOS試験対策や各種検定に向けて、勉強した。またタブレットの各学習アプリを使って基礎学力をつけた。

③実施期間　平成28年7月～平成29年3月　9ヶ月

④実施回数　週2回、月8回　9ヶ月　3ヵ所　合計245回

⑤実施場所　南駅前ふれあいサロン、宮崎県ボランティア協会、学遊館

⑥対象者・数　教室参加登録人数　20人　延べ参加人数　664人

【みらい塾参加者アンケート】

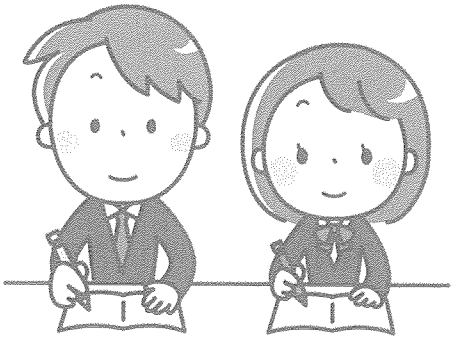
○対象者：20人、回答者数18人、回答率90.0%

【性別】	①男性	②女性	
	16人（88.9%）	2人（11.1%）	
【年代】	①10歳代未満	②10歳代	③20歳代以上
	0	18人（100%）	0

1. みらい塾の内容全般について、ご満足頂けましたか？（○はひとつ）				
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
	8人（44.4%）	9人（50.0%）	1人（5.6%）	0
2. みらい塾に参加後、「学習する習慣がついた」、「友達ができた」、「学習の理解がすすんだ」など、今後の生活に良い変化が 期待できそうですか？（○はひとつ）				
	①とてもそう思う	②そう思う	③そう思わない	④まったくそう思わない
	5人（27.8%）	12人（66.7%）	1人（5.5%）	
3. みらい塾の指導内容について、ご満足頂けましたか？（○はひとつ）				
	①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
	10人（55.6%）	8人（44.4%）	0	0

【事業を終えての感想】

今回のみらい塾の一番の成果は、相談事業との関連から、複雑な家庭環境のお子さんの居場所となれたことではないだろうか。当初は、貧困家庭の経済的なハンディを補うための事業ととらえており、いかに学力をあげるかという事を念頭に置いていたが、実際には、複雑な家庭環境、生活環境で精神的に追い詰められている子どもたちの希望を見出すべく、何が彼らの光となりうるのかを模索していく形となった。まず安心・安全な空間を提供し、その上でエクセルなどのパソコンの技術、プログラミングなどを学んでもらうことができたことは、これからの彼らの財産になっていくものだと思う。これからも学習だけではなく、将来を見据えて、いろんな形の支援をしていきたいと考える。



4）社会体験・自然体験プログラム等

①目的

生徒と学習支援員、生徒同士の交流や親睦を深めるため、また社会体験を通じて、社会との接点と学生としての役割を見つけ、また地域の大人との触れ合うことで地域の中で子どもの見守り役の方を増やしていく社会体験・自然体験プログラム等の実施した。

②実施内容

1回目：ジュニアドリームプロジェクト「親と子にとっての夢とは？」

実施日　2016/10/16、10：00～12：30

場所　宮崎市　南部記念体育館会議室

目的　学習やその他の活動の活力になるであろう「夢」について親子で考える。学習することに困難さや疑問を感じている中高生、その保護者、支援者等を対象

内容

【講　演】10:00～11:00

「夢の力」～不登校という経験を通して～

講師　塩生 好紀氏（ジュニアドリームプロジェクト主宰）

夢の発見によって生活や性格にどのような変化が表れて、どのように叶えていくことができるのか実体験も踏まえ講演

【グループワーク】11:00～12:30

「夢シェアリング」

・子どもと親（大人）で夢の共有　・自分の夢や好きなことを紹介　・他人の夢に質問やアドバイス

・他人（大人）が子どもたちの夢を紹介し、意見をまとめて発表

○総来場者　11名（小学生3名、中学生1名、高校生2名、保護者5名）

講師2名、スタッフ5名

○「夢」ということをテーマに子どもたちの可能性に気付きつつ、親（大人）の過去の夢の経緯などを辿り、新たな夢の発見や育成を図ることができた。

2回目：「子どもの成長に大切なこと」

2016/1/29、10：00～12：30

場所　鶴島自治公民館

内容

【講　座】10：00～11：00

「子どもの生活習慣（生活習慣病や遺伝、食、運動について）」

講師　中村　真希子氏（NewSupport　かかりつけ看護師）

近年の子どもの生活習慣に関する知識を得て、自らの生活習慣を振り返る。病気の怖さや仕組み、食事や睡眠、運動の大切さを学んだ。

【講　習】11：00～12：00

「成長を促すトレーニング体験」

講師　塩生　好紀氏（NewSupport 代表・ジュニアドリームプロジェクト主宰）

成長期に必要な全身運動を目的別に行った。自宅でできるようなプログラムで写真や動画を撮りながら、親子でのコミュニケーションを促しながら実施した。

【自然教室】12:00～12:30

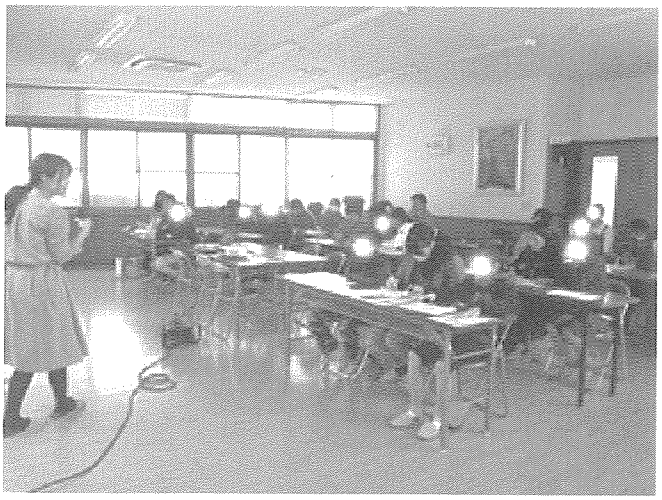
「大淀川自然観察」

講師　杉尾　哲氏（NPO 法人　大淀川流域ネットワーク代表理事）

大淀川を散策しながら、大淀川の特徴や環境省レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類の「タコノアシ」を観察した。

○来場者 36 名（小学生 10 名、中学生 7 名、高校生 4 名、保護者 15 名）、講師 3 名、スタッフ 5 名

○成長ということをテーマに自らの身体や健康、環境について親子で考えることができた。



≪2回のイベントを終えての感想≫

「夢」に対する子どもたちの価値観や考え方の大きさと深さを体感することが出来た。また親を含めた大人たちが過去抱いた夢をきっかけにステップアップしてきたことを振り返り、参加者同士で共有できたことは相互にとって今後の生きる過程で大切なことを感じ合えた。仕事だけではなく本気で好きな事、興味があることをどんな方法でとことん取り組んでいけるかの論議は白熱していた。

親子での健康理解は、日常的に考えたり話したりする機会が少なく、家庭及び家族内で必要な健康に関する情報は不足していると感じた。親から子へ引き継がれている生活習慣がどれだけ成長や疾患などに関わってくるかの恐ろしさを伝えることができたと感じている。最低限の基礎知識を持ったうえでその家庭に合った健康方法や改善していくライフスタイルは異なってくると思う。心と体を健康に保つためには、正しく本物の健康を知ること、自分もしくは家庭にとってどのようなことが不足して改善する余地があるのかを理解してもらうことが、求められていると感じた。

(株)NewSupport 代表取締役　塩生好紀

【体験プログラムのアンケート結果】

1回目：ジュニアドリームプロジェクト「親と子にとっての夢とは？」

対象者：11人、回答者数10人、回答率68.8%

①男性	②女性		
8人(80%)	2人(20%)		
①10歳代	②20歳代	③30歳代以上	④40歳代以上
6人(60%)	0	0	4人(40%)

1．イベントの内容全般について、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)

①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
5人(50%)	5人(50%)	0	0

2回目：「子どもの成長に大切なこと」

対象者：36人、回答者数28人、回答率77.7%

①男性	②女性		
18人(64.3%)	10人(35.7%)		
①10歳代	②20歳代	③30歳代以上	④40歳代以上
17人(60.7%)	0	6人(21.4%)	5人(17.9%)

1．イベントの内容全般について、ご満足頂けましたか？(○はひとつ)

①とても満足	②満足	③やや不満足	④不満足
12人(42.9%)	16人(57.1%)	0	0

5）子ども・若者の貧困を考えるシンポジウム

①目的　事業全体の成果と課題の共有化のため、事業にかかわった連携団体や支援員等の事例発表、行政からの施策の発表等を行い事業全体の振り返りと次年度への提言を取りまとめる。

日 時　平成 29 年 3 月 12 日（日）13 時半～ 16 時半
企　画　　NPO 法人みやざき教育支援協議会
会 場　宮崎県福祉総合センター本館
内 容
●講演　テーマ「ソーシャルワークから見た子ども若者の貧困と支援のあり方」
　・講師　若宮　邦彦　（南九州大学人間発達学部・准教授）
●WAM 助成事業報告
　・報告者　　濱門康三郎　（一般社団法人みやざき公共協働研究会）
●井戸端会議（シンポジウム）　テーマ「つながりを求めて」
・店子（ﾊﾟﾈﾘｽﾄ）嶋田喜代子　　宮崎市議会議員
　　山元　絵美　　スクールソーシャルワーカー
　　富井　真紀　　宮崎子ども商店、プレミアム親子食堂代表
・大家（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
　亀澤　克憲　（ＮＰＯ法人みやざき教育支援協議会代表）

●来場人数　75 名　〔参加者 58 名・講師、パネリスト、スタッフ 17 名〕
●講演内容

人権と社会正義がソーシャルワークの拠り所である。高齢者や障がい者などを一人の生活者としてとらえることが求められる。人は多様な才能、能力、スキル、願望などを持っており、苦境の中にあっても課題に立ち向かう力を持っている。その強さや回復力を信じて支援していくことが大事である。社会問題の根底には人々の孤立がある。公的福祉サービスだけでは対応できない課題も浮き彫りになってきている。行政はもちろん民生委員や福祉協力員、住民ボランティアも含め、地域住民の見守りと連携の強化が必要である。

プライバシー保護から個人情報保護法が持ち出されるが、情報を守って命を守れないのでは意味がない。今、求められるのはシームレスケア（継ぎ目のないケア）である。地域における生活者という視点で縦断的かつ横断的な支援体制が望まれる。いわば風呂敷的支援である。善意の搾取ということで、ボランティア精神を父権主義や自己満足、偽善、ビジネスなどと結び付ける傾向がある。その側面があることも注意しなければならない。

普遍的価値を持続可能なものにしていくためには科学的な根拠に基づく社会福祉実践を通して制度・政策へつなげていかなければならない。貧困問題は、自己責任、努力不足に原因を求める安易な当事者・保護者批判を生みやすい。社会の仕組みを問い、保護者・若者の権利を保障する営みに持っていく必要がある。

子どもの貧困は多様なニーズが絡んでおり、さまざまな専門機関と、地域の人々が連携協力し、社会的包摂としてネットワークを構築していく必要がある。全世代・全対象とする地域包括支援に結び付ける時期にきている。子どもの権利条約の生きる権利、守られる権利、育つ権利（教育を受ける権利、自分らしく育つ権利）、参加する権利を確認して話を終えた。

全ての人は多様な場面において無力な状態に陥る可能性を持っていると同時に、どのような苦境の中にあっても、課題に立ち向かい打ち勝つ力を持っている。

若宮　邦彦（南九州大学人間発達学部・准教授）講演より

絆の再編　其の壱

私たち一人一人が地域とつながりを持ち続けること。

行政はもちろん民生委員や福祉協力員、住民ボランティアも含め、地域住民の見守りと連携の強化。

プライバシー保護を鑑みながらの情報の共有化で異変の端緒をつなぎ合わせる。

絆の再編　其の弐

年間3万人を超える自殺者や急増する児童虐待、子ども・若者の貧困問題なども、孤立死と問題の根は同じではないでしょうか。

家族とは、地域とは何か。求められる絆、つながりとは何か。私たち一人一人が考え、問い直す契機にしたい。

２つの貧困

食べるものがない	経済的理由で修学旅行に行けない
（肉体の再生産ができない） ・着るものがない ・住むところがない ・どんな社会であっても人間として生活するのに必要なものがない	経済的理由で高校や大学に進学できない それぞれが属する社会の大半の子どもたちが「当然のこと」と捉えている利益や機会を得ることができない
絶対的貧困	相対的貧困

【参加講師・シンポジストの感想】

この度は、講師として招聘いただき誠にありがとうございました。デビュー戦にて緊張しましたが、貴法人の「ゆるく」「ぶっちゃけ」のコンセプトがあったため、楽しく参加することができました。子ども・若者の貧困をキー・ワードに、地域創生、まちづくり、共生社会などを再考する機会になったのではないでしょうか。スタッフの熱意、ギャラリーの皆さん方のひた向きな思いが今後の協働につながっていくことを期待しております。（若宮邦彦）

シンポジストも参加者も椅子に座り輪になり一体となって始まったシンポジウム。アットホーム的な雰囲気の中で、年齢、立場、職種を超えての話は、参加者の興味・関心を注ぎ、さらに、話が弾む相乗効果を生んだ。このような形のシンポジストは初めてだったが、とても居心地よく、過去の体験も踏まえながら話し伝えることができた。一過性で終わらせることなく、共に生きる社会を目指してつながり合っていきたいと思った。（嶋田喜代子）

身近な地域の実態を知ることで、支援の輪が広がります。拙い話ではありますが、お伝えすることで、少しでも子ども達の支援につながればと思い参加致しました。今回の井戸端会議では、支援者同士の『のりしろ』の部分を大切に、積極的に連絡相談を行うことで、見守りの目をきめ細やかにしていけたらと思いました。また、実践が行政を動かすことについても考えさせられました。まずははじめの一歩、大切にしたいと思います。（山元絵美）

この度は、シンポジウムのパネリストとして参加させていただき本当に有難うございました。スタイルがあくまでも「井戸端会議」としてだった為か、本当に会場一体となった温かい優しい雰囲気が流れるシンポジウムになったのではと感じがしました。様々な活動をしている方々の参加があり、シンポジウム終了後の会場で「繋がり」が増えた方が大変多くいらっしゃったように見えました。今後も是非開催してもらいたい素敵なシンポジウムでした。（富井真紀）

今回のシンポジュウムは、実践されている方や実践していこうとする方が多く、貧困家庭支援の持続可能な仕組みづくりを地域の中にどう作っていくのかが大きな課題としてとらえられたと思う。また地域の中で、専門家・専門機関と地域の人々、またそれをサポートする中間支援的な組織が、どう関係性を構築していくか、またぞれぞれの情報共有の大切さが議論されたと思う。こども食堂も、夕方になると誰でも来れる“みんなの食堂”として、庭ではこどもが遊び、大人はビールを飲みながら将棋をしているような昭和の風景の再現が必要かなーと思った次第です。（濱門康三郎）

○性別

	回答数(人)	割合(%)
男性	10	22%
女性	34	74%
未回答	2	
合計	46	

○年代	回答数(人)	割合(%)
20代	5	11%
30代	6	13%
40代	11	24%
50代	9	20%
60代	15	33%
合計	46	100%

○職業	回答数(人)	割合(%)
一般社会人	11	26%
学生	3	7%
学校	5	12%
行政	5	12%
社協	3	7%
民間支援団体	8	19%
その他	8	19%
合計	43	100%

○シンポジュウムを知った経路

	回答数(人)	割合(%)
友人・知人	10	22%
チラシ	11	24%
関係者	12	27%
SNS	7	16%
その他	5	11%
合計	45	100%

○第一部の満足度

	回答数(人)	割合(%)
まあ満足	17	37%
とても満足	24	52%
どちらともいえない	5	11%
やや不満足	0	0%
合計	46	100%

○第二部の満足度

	回答数(人)	割合(%)
とても満足	24	52%
まあ満足	17	37%
どちらともいえない	5	11%
やや不満足	0	0%
合計	46	100%

Ⅴ　おわりに

Ｈ27 年度、ＮＰＯ法人みやざき教育支援協議会との連携で「生活困窮世帯への学習支援事業」を継続し、Ｈ28 年度「貧困世帯の子どもの居場所作りと学習支援」に取り組み、一定の成果を上げることができた。

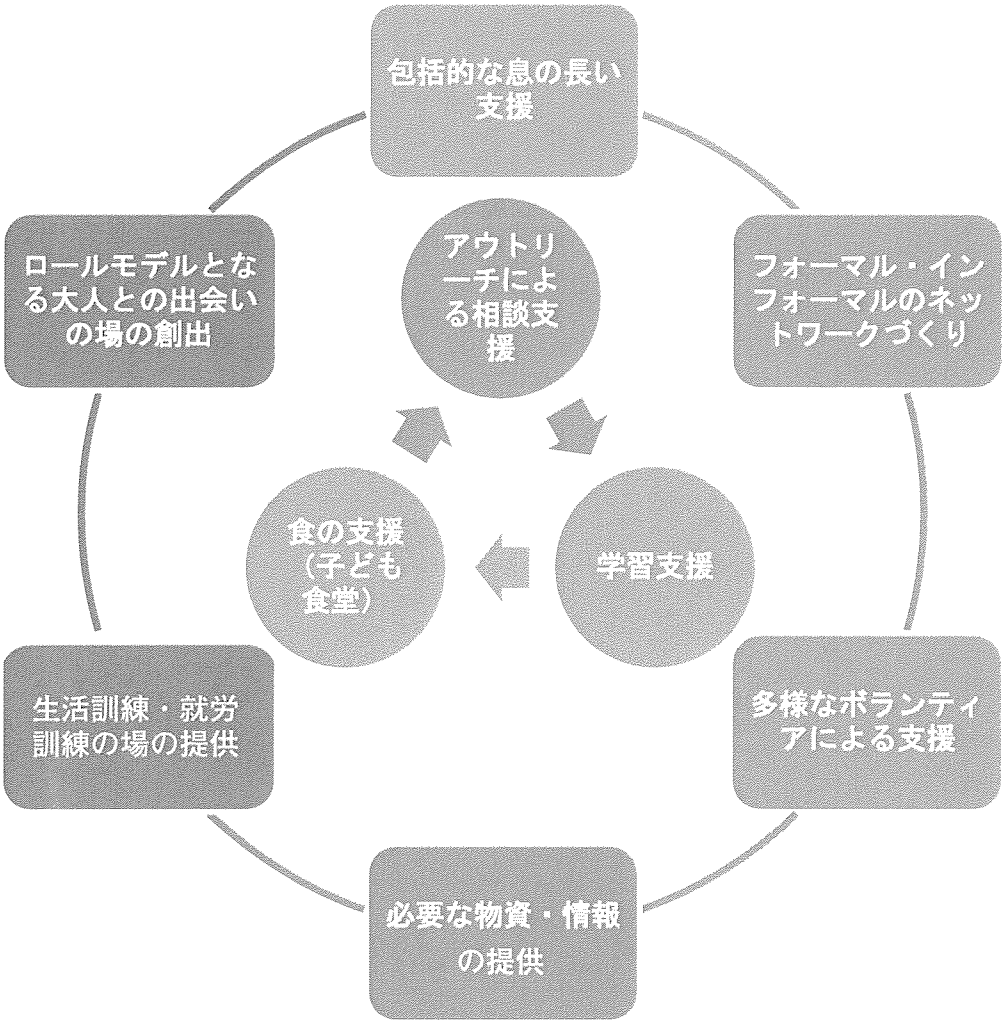
所得水準が全体的に低い宮崎県においてさらに下記のような大きな課題を見つけることとなった。

- 貧困家庭や学習困難な生徒がいる家庭における親の支援には地域機関が連携した息の長い支援、またアウトリーチによる支援が必要。
- 事業が地域に根付くために子どもの居場所の確保と専門家集団と自治会や民生委員等とのネットワークづくり
- 学習支援だけでなく、発達段階に応じた自立のための生活訓練、就労訓練が必要
- 各公的な支援制度の横の連携がまだまだ不十分なこと
- 食や必要な物資・情報が対象者に届いてないこと
- 将来に夢や希望を持っている学生が少なく、また近くに多様なロールモデルとなる大人がいないこと。つまり貧困家庭に出会いの格差が生じている。
- 子どもなら、あって当然と思われているモノが無かったり、経験する機会を奪われたりして様々な不利益を受けていること
- 協力する多様なボランティアの確保と支援

次年度は、「貧困家庭の子どもの居場所作りと学習支援」を継続しながら、初年度利用した学生さんが就労の準備時期を迎えるということもあり、就労に向けての支援が必要になってきている。

従来の学習支援・アウトリーチによる相談事業を中心にしながら、多様なロールモデルに出会え、さまざまな体験ができる機会を設け、現実的に夢が持てるような子どもの育成支援を行う。また必要な生活必需品が提供できるシステムの構築を目指していきたい。

地域における貧困家庭の子ども育成のための概念図



【運営委員のコメント】

「貧困世帯の子どもの居場所作りと学習支援事業」を通して

子ども食堂は、食材作りから調理、食事を一緒に摂るという、一連の流れで共同で関わり深まる試みは、今後も続けていけるといいと思う。事前に相談を丁寧に行い、各生徒のニーズを探ってから、学習支援に移ることがが実施されたことは、個人を大事にしたもので、手間の係ることだが今後も欠かせない事だと思う。

各種団体の強みを連携をし、地域・学校との連携確立につながることが課題。事業を進めて行く上での意思疎通が鍵。

「助けて」と私自信が言えているのか。身近にある「助けて」と言う隠れた声に気づいているのか。食事、アート、語り、子ども・大人の区別なく集える居場所の必要性を今回の事業を通して、やはり感じる。（生駒　新一郎）

「生徒が集まらない、学習意欲がない、連携がとれない、をどうするか？」

今回、相談事業を加えたことで、親の相談から学習支援につながるケースも出ました。また、スクールソーシャルワーカーや物資支援している団体からも紹介されるようになり、学習支援に結びつく成果も出しました。学校との連携では、県、市教育委員会の後援を取ることは必要不可欠です。学習意欲については厳しい面があります。面談した児童生徒のほとんどが継続的な学習支援につながっていません。子どもたちの自己肯定感を上げるためには専門機関の協力が必要でしょう。支援員の質の向上も欠かせません。そのなかでプログラミング学習を希望する子どもたちが増えており、興味関心から継続した学習にもつながっています。連携に関しては、定例の井戸端会議では情報共有だけでなく、支援団体のフォローの場にもなっており、行政や学校も含めて、関係機関の役割を確認しつつ日ごろから連絡を取り合うことが大事だと感じました。（亀澤克憲）

「子どもの居場所をもっと地域に」

ある日、「そこには参加できません。」と電話がかかってきたことがある。宮崎市内の小・中学生には児童ひとりで移動する範囲が学校で決められており、そのハードルがあるために参加できないという。

本事業では３箇所に学習支援会場を設置していたが、それだけでは手の届かない部分も実は多くあったのではないかと感じている。かつて子どもの集まる場だった「公民館」や「集会所」の存在を知らない子どもは多い。もう少し地域と子どもが近くなれば、もう少し根深く子どもの居場所づくりができるかもしれない。

本事業では手の届かない部分もあったが、学習支援では学校区を超えてたくさんの児童が集まってくれた。学校区を越えた仲間意識もあり、よい居場所にはなったのではないかと思う。（岩井裕理子）

「こどもの笑顔を見つめて・・・」

こども食堂の８回コースで回数を重ねるごとに子ども達の表情も変化してきた。協力しようとする気持ち、仲良く過ごすことの楽しさ、みんなとおいしいものをお腹いっぱいに食べることの喜び、大人の優しさ、様々な体験に参加したて子ども、大人を含めて貴重な体験となったのではと思う。これから生きていく社会生活の中で、つまづきそうになっとき、困った時に、この経験が生きる支えの一つになれば幸いである。
子どもが自立するまでは、家族以外の大人社会が守っていくべきと考え、今回の事業のお話に感謝するとともに、更に課題等をもう一度見直し、今後の活動に活かしたい。（澤田孝子）

「事業の継続に向けて」

「貧困家庭」対策の事業であるのに「貧困家庭」の姿がなかなか見えてこない実情があった。また、その実情を把握できていたとしても、当事者が介入を望まなければ何もできないという歯がゆさもあった。もし、来期もこの事業を継続するのであれば、スクールソーシャルワーカー、民生委員の方などと連携を密にとり、必要としているサポートの一翼を担う形での事業展開が望ましいのではないかと感じた。学習支援に関して言えば、劣悪な環境で精神的に追い詰められている子どもたちは学習意欲が低く、塾は居場所としての機能は果たせたが、学習支援としての機能と両立させていく事に難しさがあった。学習支援の前に、まず生活環境の整備、メンタルサポートが必要であると思われた。学習支援自体は、Eーラーニングで個人のニーズに合わせるのがなかなか難しく、講師１人で１教室を運営するのは大変であった。学生のボランティなどを募り、事業が終了しても継続していくようなシステム作りをしていければと考えている。（市園　京子）

「さまざまな機関との連携と協力のしくみづくり」

発信力・営業力・ネットワーク不足で、対象となる方たちの掘り起こしが不十分であった。相談、居場所、学習を統合させて行っていくのか、、それぞれが自立して行う形態なのか、他、事業自体や事業内の組織形態の把握がスタッフ間でしっかりとできないままだった。地域に根差した活動や貧困に関わる経験の薄いスタッフばかりであり、ベースが無かった。途中から相談会は開催をやめ、タイミングを見ながらマッチングする形にしたが、相談員とひとり親たち、どちらも忙しく、スケジュール調整が難しかった。

今年度は手探りの年度であったと思う。
個別に地域などに居場所を作る、、繋げる支援をしていくことが効果的だと感じた。さまざまな支援機関・サービスと連携し、ボランティアのネットワークを作るしくみ作り・子どもの相談・物資の支援の必要も感じた。（高橋　優子）

「社会貢献事業の提案」

３月１２日開催の「子ども若者の貧困を考えるシンポジウムー」において主催者挨拶の中で「子どもたちの明るい未来を切り開くために、私たちに何ができるのか。本音で語り合って頂けたら」と述べた。また、「あたたかい雰囲気の中で、笑顔がつながるシンポジュウムになれば良いなー」ともふれた。

この事業の中で、ネットワークの大切さを再認識し、共催の団体と力を合わせ知恵を絞り、今年度の事業を実施できたことは「貧困世帯の子どもの居場所作りと学習支援事業」の大きな成果の一つと言えるだろう。

特に「貧困の現実を知り」そのことを「広く社会に知らせる」ことが、今後の事業展開に重要だと位置づけマスコミ活用を行った。（ＭＲＴラジオ２月１回、３月２回、今後テレビでの報道特集やラジオ番組出演予定）

そのことが企業の社会貢献（商品提供や場所の提供・職員派遣等）や今後の研修事業参加者確保へつながるものと思われる。更にマスコミ活用に取り組み、企業の協力を頼んでいきたい。（出水和子）

「貧困世帯を支える地域づくり」

今回の事業を通して対象になった子どもには概ね良い結果が生まれてきている。また支援して下さる企業や個人も増えてきている。ご協力頂いた関係機関の皆様にお礼を申し上げます。貧困対策に向けた持続可能な支援の仕組みを作り上げていく重要性も共有できた。

さあ！ここからスタートだが、ただ事業としての貧困対策をいくら徹底してもそこには限界があることを認識している。貧困の連鎖を止めるためには子どもに学力をつけさせるだけではダメで、自己肯定感を高め生きる力や耐性をつけさせることが必要で、そのためには、様々な社会経験が必要になる。つまり地域のさまざまな大人と出会う機会が必要だと思う。閉じこもりがちな子どもや若者を地域にデビューさせるきっかけ作りが必要だと感じる。地域の人々の多様な協力の重要さを感じている。

色々な意味で子どもを支えるための地域の寛容力、涵養力がなくなっている現代において、地上からいくら水を注いでも子どもを育てていくことは出来ないのではないか。人との関わりが減っている子どもや若者たちを回復させるには、まずは、地域での子育ての視点で長い年月をかけて地域を耕すことから始め、地域の子育て力を向上していく必要があるのではないか。それは、地域の共同作業やお祭りの復活ではないだろうか。（濱門　康三郎）

参考：各事業のアンケート調査結果

1．家庭訪問・相談支援

良かったと感じたこと・解決できたこと

（利用者より）

○気楽に相談できています。子どものダメな点でなくできるところを見つけていただき伸ばすには、、、、と難しいですが、話ができました。

○大人として、社会ルールを、専門的知識で指導していただいたこと。

○色々な学習内容の話ができて、面白かった。楽しかったと本人がいつも話していた。充実した時間でした。

○子どもの好きなこと、得意なことを伸ばしてくれようとしている。じっくり子どもの話を聞いてくれる。親の話も聞いてくれる。子どものことを話す場はたくさんありますが、親の心の内容を話せる場はなかなかないので聞いてもらえるだけで、だいぶ心が軽くなります。

○思春期の不登校の子どもを持つ私（一人親です）に　常に寄り添ってくださり、その時その時にあった方、場所等などを紹介、相談にのっていただきました。そのたびに心を軽くし、前を向くことができました。まだまだいろいろなことが起こる日々ですが、皆さまがいてくださることが子どもと向き合う力になっています。

○実情を聞いてもらって考えてくださり、提案もらった中で２か所に行くことができました。ただ、情報提供なら誰でもできるが、適切なものを提案してもらいました。世界が開けたように感じた。子どもの良いところも感じる事ができ、嬉しかった。

○自分が繋いでもらって社会と関わることで楽になった。子どもが不登校や引きこもっていると、ひとり親で貧困の自分など仕事と家の往復だけで取り残されている気分になる。関わってくれている人がいるという安心感があり、気持ちが楽になった。次はどうしたらいい？と考えてもこんな親は普通どうしたらよいかわからない。解決したことは、就労支援施設につながったこと。

○子どもが、学校と家庭のみの生活、友達もできず楽しみを見つけられなく登校渋りもあった時期で、大好きなことを教えていただき、楽しんで参加している。先生方に話をきいていただいていると、本当に解決できるのではないか、と自信がついてきます。励みになります。（相談員より）

○このような形での相談の事業は、画期的であったと思う。みらい塾、こども食堂など子どもの居場所を提供でき る事業も並行してあったことで、ある程度の成果を上げることができたと思う。

○好きなこと、やってみたいことを一緒に探しながら、ゆっくりとしたペースで学習することを話し合って決められたこと。・本人が学習することを望み始めたタイミングで支援を始めることができたため、楽しく学習を進めることができたこと。・学校で履修できていなかったところも本人のペースや理解の方法に合わせて支援していくことができたこと。・興味に合わせて教材を選び、その後他の内容に広げていくことで、無理なく学習できたこと。・学習に集中できる時間が、会を重ねるごとに長くなってきたこと。・選択の幅が広がってきたこと。初めは二者または三者択一でなければ選択できなかったが、自由選択や意見を求めると考えてからイメージを支援者に伝え、選択肢を求めてきたりすることも出てきた。穏やかな表情で、落ち着いて学習に取り組めている。・応用問題は支援者と一緒に考えることを楽しみながら解くことができたこと。問題が解けると嬉しそうに、繰り返し説いてみて忘れないようにしたいと話していた。

○良かったこと･親子関係の関係改善に少々役立てたこと。解決できたこと･親の自己理解不足を改善したことで、親が落ち着いて子どもと関われるようになったこと。

○色々な団体と手を取り合いながら、利用者宅対して様々なアプローチをかける事ができたのがとても良かったと思う。・一か所の支援のみではなかなか生活・学力が向上しない世帯が多いと思われるが、複数の支援を組み合わせる事で利用者に相談先も増やしてあげる事ができ、生活、学力の悩みを打ち上げてくれやすくなったと感じた。

○いろいろなその人にあった場面設定をされており、リラックスした状態で相談できる環境になっていたところがよかったと思います。

○いろいろなその人にあった場面設定をされており、リラックスした状態で相談できる環境になっていたところがよかったと思います。

○親御さんの心の安心になれた。進路についてなど相談に乗り、学校他とも連携が取れた。就労支援機関に繋げる事が出来た。その親子オリジナルの居場所、親御さんの居場所を作ることができた。家族の支援に入ることができた。食料などの配達、スポーツ活動に向けての支援もできた。みらい塾との連携の中で、プログラミング講座などニーズに沿ったプログラムを親御さんと相談しながら進められた。不登校ひきこもり児童の家庭訪問の中で、学習支援ができ、家庭全体への関わりができるようになった。ネットワーク・、他機関と連携・認知度が上がってきた。

あまり良くなかったと感じたこと・解決できなかったこと

（利用者より）

○相談する時間がなかなかとれないことが残念です。（私）子どもの問題の解決はすぐにはできませんが、相談する場所がある事が嬉しい。

○一般的なルールを本人が理解しきれていない。本人の回答と違うとき、何度も質問して質問内容がズレてくる。

○良かったら、今後は英語などにも取り組んでいってもらいたい。というのは母親の希望です。（相談員より）

○相談に来られるのであれば、しっかり対応できるのであるが、真正面からの相談を望まれない方、時間の取れない方などもいらっしゃり、消化不良の感があった。

○金銭面での相談を保護者からされた時に、もっとうまく行政との連携を図っていかないといけないな、と思った。

○認知度が低いためか、集客に困難さがあったと感じた

○スクールソーシャルワーカーの方などとの連携など、各方面の方と繋がり真にこの事業を必要とする方の掘り起こしが必要と感じた。

○事業の目的が、子どもへの学習支援なのか、子どもへの相談なのか、親へのレクチャーなのか、親の相談なのか、方向性が明確に伝わってこなかったために、自分の能力をどう活かしていいか分からず、事業への関わり方がとても難しかったです。

○集客に困難さがあった。貧困世帯に関わる経験が乏しくネットワーク不足もあった。

相談事業　改善のアイデア

（相談員より）　※利用者からは回答なし

○対象の絞り込みと支援方針の絞り込みが必要かと思います。
まずは、相談なのか、教育なのかを明確にすることが先決と思われます。

○やはり、行政としての「公的支援」の情報と「民間支援」の情報の拡散にもっともっと力を入れていかないといけないと思うので、各支援内容のより詳しい内容を記載した冊子やHPの作成を考えたい。

○行政に働きかける。しっかりとした組織作りをし、公示することが必要と感じた。（ちょっと怪しい団体と思われている節もあったため）

○行政・学校・支援関係・地域との連携、広報の充実　グループカウンセリングの実施　利用者別に居場所を作る・繋げる　親のキャリア支援　登録された相談員以外も使い、マッチングの精度を上げる　家庭の家政のサポートに入る

2．子ども食堂

（利用した人）

① よかったこと

・こども食堂でのできごとを家で話してくれた。
・カレーもサラダもおいしかった。
・いろいろな人と知り合うことができた。
・これまで家では食べなかったシチューを食べるようになった。
・からっと上がったからから揚げの作り方を先生に聞いて作って欲しいと言ってくれた。
・「参加していたおばちゃんの話がまた聞きたい（山や川のお話など）」
・お手伝いを進んでしてくれるようになった。
・毎回足りなくなるほど、みんなが食べてくれた。
・お兄ちゃん達と話ができて良かった。
・活躍する場が増えた。

② 悪かったこと

・ドレッシングが足りなかった。
・場所が狭かった。
・人数と座席の数と比べてテーブルが狭かった。
・うるさかった

③ 改善のアイデア

・今回のようなプログラムと食堂などと提携し、子どもがチケットを持って食堂に行って食べる内容もあって良かったのではと考える。
・次回からは子どもたちにも実施のアイデアを出してもらうようにしたい。
・料理好きの中高生を募集し、メニュー等も話し合い、子ども達がコックになって子ども達や大人（親など）の方にも食べて頂くような内容をすることで、参加（利用者）したこどもに食育を意識したやり方。

④ その他の自由意見

・共働きや母子家庭が年々増えてきている現代社会では、子どもがひとりで食べることも多くなっている。家族がそろう豊かな食卓は昔話となり、今日ではひとりさびしく食べる子、コンビニに走る子、食べきれない子と様々である。親の働かざるを得ない状況を理解し、我慢した食生活もあるのではと思う。
・時には、ひとりで食べる食事も、母親の愛情いっぱいのお弁当であればおいしく満足して食事ができると思う。間違っても食事どきの夫婦喧嘩、常に小言を言いながら子供に食事を与えることだけはして欲しくない。
・おいしいものをみんなと楽しく、たっぷりと食べさせてあげれば、こども食堂の意味があるのではと思われる。

（作ってくれた人）

① 感　想

・楽しくみんなで食べている姿をみながらコミュニケーションも取れて、いかに食が大切か分かりました。（40 代女性）
・自然食の勉強をしているので、子ども達に旬の野菜でつくって料理を食べさせたい。（60 代女性）

・地域のことをしている関係で、家庭状況が把握できているが、食生活に踏み込むことは困難で私にはできません。子どもの心を配慮しながらやっていく必要がある。（60 代女性）
・このような取組はとても大切です。子どもは日本の子ども。すくすくと育っていただくためにも大人や社会が支え、見守る必要があります。そういう意味では、このこども食堂の考え方、取り組みは必要で、アピール性は確かにあり、多くの人々に関心を持ってもらいたい。行動を起こし、皆で知恵を出し合いこどもの成長を見守りたい。（60 代男性）
・参加者の声では「別にありません」、「感謝しています。」と喜んで下さった。
・毎回の人数の把握が難しかったので、常に多めに準備しておいた。
・チラシ作成時の工夫が足りなかった。
・常日頃から、近隣の方々とのつながりが少なかったことで集めきれなかった。常日頃の近隣の結びつきを考えるきっかけになった。
・畑作業や創作の部分が計画通りにやれなかった。
・子どもたちの旧身を引くプログラムづくりができなかった。

②　その他の自由意見

・国の予算を使うことも大事だが、数年前に取り組み、直ぐに止めてしまった。コミュニティ税の仕組みをもう一度考えてはどうか。県民が年間 500 円を納めて、この使途は、こども食堂や学習支援など、子どもの成長のために地域にゆだねて安心して、子どもが暮らせるような地域社会を希望します。（70 代女性）

3．宮崎みらい塾

（利用者より）

① よかったこと

・外に出るきっかけになっている
・学習時間が確保できた。
・音楽を聞きながらリラックスして学習することが出来、危険物取扱に合格できた。
・学習が楽しかった
・楽しい。
・学習の理解が深まり、学習する習慣がついた。
・空いた時間を有効活用することが出来た。
・スクラッチの講師がついて勉強になった。
・学校では学べないようなことをパソコンを使って楽しく学ぶことが出来た。
・苦手な事が少し得意になった。
・習っていないところも予習することができた。
・居心地がよかった

② 悪かったこと

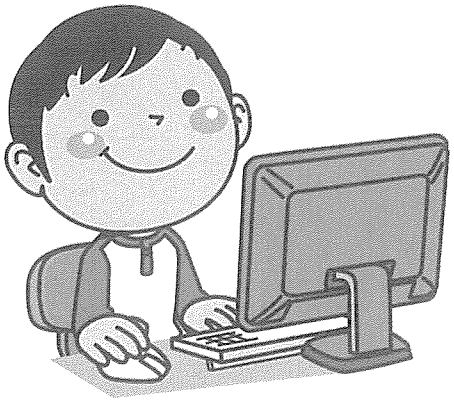
・勉強しない人がいた。
・楽しくコミュニケーションがとれていたので、なかったと思います。
・遊んでばかりの人がいた。
・時々データが消された。
・特になし （多数）

③ 塾のあり方の改善のアイデア

・パソコンの中にエクセル、ワード、パワーポイントがほしい。
・現状維持
・学習時間をふやしてほしい。
・動画を見る時間を制限する
・おかしを一人一個は欲しい
・個々の趣味をもっと共有できるようにしたらいい。
・必ず勉強する時間を作る。
・これでいい！

④ その他

・スクラッチの家庭教師がほしい。
・おやつを多くしてほしい



（講師より）

① よかったこと

・子どもたちの居場所になっており、自分で学習勉強する気持ちになる場所となっている。
・スクラッチを通して子供に学びについて理解が深まった。
・学習だけでなく、将来をみこしての技術（mos, プログラミング等）のスキルを学ぶ場所となれた。
・複雑な家庭環境をかかえた子どもたちの居場所となることが出来た。

② 悪かったこと

・パソコンが学習器具でなく、動画視聴用になっていた。
・タブレットの台数をそろえたが、あまり使用していなかった。
・生徒の人数に対して、講師が一人なので全員に目を届けることが出来なかった。
・相談事業からの生徒さんは、学習意欲が低く、居場所としての役割は果たせたが、ユニバーサル数学等を有効に使えこなせなかった。
・各教室１人の講師となっていたが、生徒のニーズがそれぞれ違っており、１人の講師で運営することには無理があった。
・当初、相談事業のとの連携がうまくいっておらず、どのような生徒さんかわからずに入塾し混乱した。

③ 塾のあり方の改善のアイデア

・コンテストで賞を取ったようなオンライン教材を使わせてほしい。自学自習できる環境ではないと、多人数は教えきれない。ユニバーサル数学は不人気。
・一部の人に負担が集中しないように、他の人が、カバーできるように情報の共有と人材の確保が必要と感じた。
・ニーズにわけて、各教室の特色を出し運営する。居場所としての機能と学習する場の提供をうまく両立できるような、ルールをしっかり設ける。
・講師の数を増やす。
・今回、明治製菓さんからお菓子の支給をしていただいたのでよかったが、貧困家庭の学習支援をするにおいて、軽食などの支給は外せないところだと思うので、予算をつけてほしい。

④ その他

・YouTube をブロックしたい。

4．子ども・若者の貧困を考えるシンポジウム

【参加者の感想】

・想いを科学的に見ていくことも大切なんだと、自分の足りない所が見えました。
・支援者と繋がることの難しさを感じてました。今日この会議に求めて来ましたが皆さんも同じ思いをされていることを知りました。
・ユーモアもあって面白かった。
・もっとパネラーのお話を聞きたかった。
・居場所づくりの大切さ、データで示すことによって、制度等に繋がっていくことがわかった
・現状・課題について知ることができ良かった。
・資料があって詳しく話が聞きたいと思った。
・現状の把握ができとても良かった。
・繋がる大切さを学ぶことができました。ありがとうございました。
・いろいろな意見が聞けて本当に良かったです。地域とネットワーク
・支援のあり方について具体例もありわかりやすかった。
・宮崎の状況を知ることができてよかった。
・ソーシャルワーカーについて改めて学びなおしをさせていただけました。子どものためにこれから何ができるか考え行動していきたいです。
・ケアを繋げるためにはどうすればいいか、考えさせられました。
・初めて聞く話があり良かったです。まだ情報が伝わることや繋がることが困難な状況が分かりました。
・保健室に"情報"を貼る。家の壁に貼る。といった情報周知の方法を工夫することが大事だと感じました。
・わかりやすく知りたい情報が伝わり、あっという間の時間でした。とても勉強になりました。ありがとうございました。
・表面だけでなく、ほんとに具体的な事が聞けて、又これから自分の動くことの参考にできました。
・すこし難しかった。
・具体的な事例をお聞きすることが出来、問題の実体を把握することが出来た。いろいろな立場の方のご意見を聞けて、大変有意義だった。
・全体的な勉強になりました。
・沖縄の円卓会議に参加して、素晴らしい方法だと思いました。ご検討ください。
・不足していたり、理解していなかったことを教えていただきました。
・久しぶりに福祉の勉強をしました。
・情報の共有の難しさを感じました。そう考えたら、どこの学校でもやっている家庭訪問のなかで、勉強のことだけでなく、生活に困っている家庭に対して、こんな相談窓口がありますよ、繋ぎましょうか？
とか出来るといいのかなと思いました。
・この形だと肩を張らないで話せてよかった。いろんな活動をされている方の状況を知ることができて良かったが、もう少し深く繋がれるとよいなと思いました。
・また来させていただきたい。開催された皆様に敬意を表します。
・語りつくせない！
・短時間でソーシャルワーカーについて説明してくださって、大変良かったです。
・子ども食堂に多くの方が関わっていらっしゃることが分かりました。
・わかりやすい話しで良かった。
・時間が足りなく、皆の話をもっと聞きたかった。これからもこの時間をもっと作ってほしいです。

・福祉の視点―、行政がもう少しシームレスで対応できるシステム作りをしてもらえるといいのにと感じた。
住み易い社会（地域）環境作りが小さなかたまりからでもできるよう、それぞれの自治体で必要と思った（諸課題の可視化）。
・こちらの想いと対象となる方々とのつながり方が難しいことがとても印象的だった。
可視化のために学校と民生員の方の連携―、各校でできるといいですね。
・時間が短すぎた。デジメがほしかった。
・いろんな実践を行っている方々がいることを、お話しの中で知りえた。
・初めて参加したシンポジウムでした。子どもの貧困は全く見えなかったけど周囲の考え方、
働きかけ手配の仕方など理解できた。
・今後は専門機関との連携協力・地域の人々との係わり方、そして支援センターとの連携が大切だと感じた。
・各連携の係わり方に苦労されていることが伺えた。

井戸端会議で話したかったこと・伝えられなかったこと

・ありがとうございました。また参加させていただきたいと思います。（女性・30代）
・いろいろな職種・立場の方から話が聞けて勉強になりました。（女性・20代）
・学校の業務拡大。6時～9時と16時～21時の合計8時間を増やす。（男性・40代）
・皆様の熱い活動、お気持ちを受け止めさせていただきました。
今の支援が自分とキャリア支援に繋がった側などありましたらお伺いしたかったです。（女性・50代）
・初めて参加させていただきました。行政でできること、できない事など種々の課題がよく分かりました。
全体として、大枠のところでの解は見えているような印象を持ちました。
すなわち、これを実行に移すには動ける力を持った議員などの政治家だと思います。しかし、現場の声を聞く今回のようなシンポジウムの開催は必要です。今後もぜひ参加していきたいと思います。（男性・40代）
・本当に現場で何が起きているのか、本当の姿を知ることが大切でそれから動き出すのではないかと思いました。
・子供の育て方に集中したのは良かった。（男性・60代）
・延岡は（陸の孤島）と言われています。是非に情報を流して欲しいと思います。
・学校を通じてチラシを送って下さい！（男性・60代）
・学校がもっと福祉に関する情報を得て、子どもたちと関係機関をつなぐ役割を果たさないといけないと思います。（女性・50代）
・子供、若者、老人の話が聞きたいです。（女性・60代）
・初めての事で、聞くだけでも充分皆さんの取り組みが見えました。（女性・60代）
・有意義な時間を頂きありがとうございました。行政の柔軟な対応に期待します。
民間からの声をもっともっと出せればと思います。（60代）
・学習支援業として宮崎市内の3ヶ所では遠隔地の人は利用困難との意見があったが、
これを公立中学校区ごとに公民館等を活用して巡回で実施できないか、指導者の増もあるかもしれませんがボランティアで参加できる人をお願いできないか。（男性・60代）
・子供の貧困？外からは分からない―、と一方的に思っていましたが、どちらかというと高齢者の分ばかり目に行きがちですが、登下校の見守り、子供達の係わりの中で話をし、いろんな話をしてもらえる民生委員でありたいと思った。（女性・60代）

シンポジウム全体の感想、今後の期待、やってみたいこと等

・今回のシンポジウムに参加させていただきまた活動に対する頑張ろうという意欲が沸いた。（女性・30 代）
・また、ぜひ研修をしてほしいです。（女性・20 代）
・既存のシステム、インフラのリビルド、リストラが必要だと思います。（男性・40 代）
・1 つのテーマにしぼり、参加者が 1 つの方向（例えば、子供の健康、自殺者の問題等）で
深みのあるシンポジウムを望みたい。（男性・60 代）
・私は一級の障害者です、12 月でなりました。職場の部署を変えてもらっていますが、皆さんの仲間です。一緒に考えていきたいです。
・資料は掲示するだけではなく、一人一人に流して欲しかった（男性・60 代）"
・次回の案内には是非教育委員会等の後援をとって、チラシが各学校へ行くようにしていただけると良いと思います。（女性・50 代）
・自分も貧困なので周囲の貧困さの目の付け所が足りなかった事を反省します。
次回もまた出席したいです。（女性・60 代）
・地域の方々とのつながり、朝夕の挨拶から始まり時間の余裕を見つけて井戸端会議が出来るとコミュニケーションもとれていくと思う。
地域の学校等の行事に参加し、「卒業式に来ていたおばちゃんだ」等声をかけてくれるようになりました。
長年福祉関係の仕事に就いて様々な家庭を見てきました。現実の保育者として大切な子どもを見守って行きたいです。（60 代）
・行政が中心となり、各関係団体が各自の仕事はどこまでやれるのかお互いに確認し、
この団体が繋がるようにその接点を明確にさせる。（男性・60 代）
・様々な事例・課題を知ることができてよかった。（男性・20 代）
・これからも自分にできることでいろいろな形で携わっていきたいと思ってます。（女性・50 代）
・たくさんの仲間がいると感じました。これからも勉強会して下さい。（女性・40 代）
・一方通行の話しではなく、座談会形式のやり取りがとても良かったし、本音の声も聞けたので、勉強になりました。（女性・50 代）
・色々とフェアな意見が出せるようなファシリテーターの亀澤さんの配慮で、いつもポジティブな素敵な場と思います。また参加させていただきたいと思います。（女性・40 代）
・外からは見えにくい貧困と取り組むのは大変な事だと思った。
繊細な問題もあり、関係機関の連携で情報のつながりの大切さもわかりました。（女性・60 代）
・様々に活動されている方が集まり、とてもいい連携が生まれる会と感じました。（女性・60 代）
・小さな地域単位で立ち上がっていくと、いい方向に向かってゆくのではないでしょうか。社協との連携も大事なのではないでしょうか。（女性・60 代）
・いろんな方々のお話をお聞きできてうれしかったです。ありがとうございます。（男性・60 代）

一般社団法人みやざき公共・協働研究会
880-0001　宮崎市橘通西５－６－５７ 山崎ビル 4F
電　話：０９８５－５５－０５００
ＦＡＸ：０９８５－５５－０５０１
postmaster@miyazaki-pcr.org